

泥酔睡眠
えっち



〜後輩に恋愛相談してたら
酔っ払って寝てる間に
ハメられてしまいました〜

S i d e ・ あ な た

「ふざけんじゃないわよっ！」

ぐつとビールを一気飲みし、ジョッキをだんっ！とテーブルに叩きつける。

「一ヵ月ぶりに会えると思ったのに！急に用事が入ったから、ドタキャンて！私のこと何だと思ってるのよっ！」

大声を張り上げて怒鳴り散らす私を、目の前の席に座っている志信くんが頬杖をついて呆れ顔で見ている。

——大学のサークルの先輩だった彼氏が、関西の会社に就職して遠距離恋愛になった。はじめの頃は、毎日のように通話して、毎週こまめに逢っていたけれど。

一年経った今では、週に一度LINEのメッセージが来ればいい方。こちらから送っても、既読スルーがデフォルトだし。

週一の逢瀬も何かと理由をつけて先延ばしにされ、ここ数ヶ月会えたのは一、二度くらいじゃなかろうか。

なのでセックスはおろか、キスすらろくにしていない。

そのたびに私は同じサークルの後輩の志信くんを呼びつけ、激安居酒屋で愚痴りまくっ

ていると言うわけである。

「先輩、それって浮気してるんじゃないすか？」

志信くんが枝豆をつまみながら、不穏なことを言う。

「うう……やっぱりそうなのかなあ」

「そつスよ。だいたいそんな、毎週何か用事入るっておかしくないすか？ 絶対女と会ってますね」

「やだあああ……考えたくない〜！」

絶叫してテーブルに突っ伏す。

うすうす感づいていた。

一緒にいても上の空だし。やたらスマホ気にしてるし。なんか服の趣味変わった気がするし。

「でも、私が卒業したら結婚しようって言ってくれたもん……」

「だから就職活動してないんですか？ 専業主婦希望とか神崎先輩の負担重すぎでしょ」

「うつるさい！ すいませーん、ジョッキ生で！ あとハイボールもください！」

通りがかった店員さんと呼ばひ止め、おかわりを注文する。

志信くんはうんざりしきった顔でその様子を見ている。

「さすがに飲み過ぎじゃないすか？」

「いいの！ 今日は吞んで忘れるの！」

「毎回それ言ってる気がする」

「てか、別れちゃえばいいのに」

志信くんの無慈悲な一言に、枝豆へ伸ばしかけていた手がピタリと止まった

「……それが出来たら苦勞はないよお……」

急に悲しくなつて、ぐずぐず鼻を鳴らしはじめてしまった。自分で自分がめんどくさいけど、酔つ払っているので抑えが利かない。

「三年もつきあつてるんだもん……そう簡単に別れられないよお……情つてもんがあるでしょおお……ううう」

「ジョッキ生とハイボール、お待たせしましたーっ」

絶妙なタイミングで運ばれてきたハイボールのグラスをひったくり、一気に喉へ流し込む。濃厚なウイスキーの香りとシュワシュワした炭酸が口の中で混ざり合つて気持ちいい。「は……効く……」

ふはあと手の甲で唇を拭くと、志信くんは完全にドン引きしている。

「マジ酒カスっすね、先輩」

綺麗な顔してほんと毒舌だな、この子は。

てか、ブツブツいいながらもなんだかんだで付き合ってくれるし、根は優しい子なんだ

よね。

「呑まなきゃやってられないよお。てか、志信くん彼女いないの？ サークルの女の子たちめっちゃ志信くん狙ってるのに」

「……いたら、先輩となんか呑んでないでしょ」

「あつはっは！ そりゃそーだ！ そんなにイケメンなのに勿体ないねえ！」

そう、志信くんはかなりビジュアルが良い。

道を歩いていたらよくモデルとか芸能事務所にスカウトされるらしいし。

180センチあるすらりとした長身に、長い手足。

涼しげな目元にすつと通った鼻筋の、中性的な顔立ち。

グレージュに染めたマッシュヘアは、頭の形が良い志信くんによく似合っている。

ユニク〇のTシャツとジーパンでもキマる男、それが志信くんだ。

どこから見ても完璧な彼が、なぜ酒力スだめんずの私と一番仲が良いのか謎だ。

入学式の日、あまりにもキラキラしている彼を見つけて自分が所属する映画研究会に勧誘した。

私は自主制作の映画を撮っていて、彼を主役に映画を撮りたい！ と思ったのだ。

ダメ元でお願いしたらあつさりオーケーしてくれて、一緒に一本短編映画を作った。

……映画の出来は、あんまり良くなかったけど。それから志信くんは何かと私にくっつ

いてくる。

私があまりにもダメ人間なので、面倒見が良い志信くんはほっとけないのだろうというのが周囲の見解だ。

おかげで志信くんを虎視眈々と狙っている女子たちからは嫉妬されずに済んでいるけど。隙あらば彼の情報を教えてくれと頼まれている。

「俺、先輩といるのが一番楽しいし」

「えっ、酒飲んでるだけなの？」

「酒でダメになつていく先輩見るのが面白くて」

「オモシレー女粋なんだ……まあいいけど」

「……だからさ、俺にしとけば？」

「……何が？」

「情だけでつきあってるんでしょ。なら、乗り換えてもよくない？」

お、珍しく真顔。もしかしてネタじゃなくて本気で言ってる？

正直顔はドドドストライクなんだよね。

いい子だと思うし。

惹かれてるのは否定出来ない。

でもさ、私みたいな酒クズでだらしない女、君には勿体ないよ。もっといい子がいるよ。

おねえさんは君には幸せになつてほしいよ。

「あつはうーん、検討させていただきます」

「すみません、そろそろラストオーダーの時間ですぐ」

店員さんが最後の注文伺いにやつてきたので、ここぞとばかりにお酒をオーダーする

「ハイボールとレモンサワーとジョッキ生とうーん、あとカシスオレンジ！」

「何スカその組み合わせ」

「カシスはデザートだよ♪シメに甘いものがほしいなつて」

「デザートまで酒つて最悪ですね」

「ほつといて。あゝてかさすがに飲み過ぎたかな。ちよつと眠いかも……」

もう飲み過ぎて脳みそがアルコールでちやぶちやぶだ。

「寝ていいつスよ。俺が家まで運ぶんで」

「ほんとゝ助かるうゝいつもありがとね♪」

「ゲロだけは吐かないでくださいね」

「わーかつてるつてえ♪」

「ハイボールとレモンサワーとジョッキ生とカシスオレンジ、お待たせしました！」

店員さんが両手にグラスを持って登場する。

「待つてましたーっ！」

私はいそいそとグラスを受け取り、ハイボールを流し込んだ。

★★★

「ん……」

頭の奥が痺れてどんよりと重い。

身体がジンジンして、やけに頬が熱い。

（気持ち悪……）

背中に馴染むマツトレスの感触。多分ここは私の部屋だろう。

ぐでんぐでんに酔っ払って、テーブルにつっぷしてしまったところまでは覚えてる。

そこから先は、記憶がない。

多分、志信くんが運んでくれたんだろう。

（志信くん……自分ちまでちゃんと帰れたかなあ）

いつも、私を部屋まで連れていつてくれたあと、自分のマンションに戻っちゃうんだよね。

泊まっていつでもいいのに。

「……ん」

ふに。ふに。

なんか……上に乗ってる。重たい……

金縛りってやつかな。たまになるんだよね。

でも……いつもと違うみたい？

すごく熱くて、幽霊にしては肉の質感があるっていうか……特に下半身。なんかすごい、弾力がある塊が、ぐいぐい当たってる。

(なんだつけ……これ……ああ、うまく思い出せない)

ぴちゃり。

ぬめつとしたものが、指先に触れる。

生温かくて、べちゃべちゃして……

なんだろう、これ。

何かの生き物みたいなの……

(何……これ……?)

ちゅぽ♡ちゅぽ♡ちゅる♡ちゅる♡

「ほっそい指……ん……れろ……っ。ちゅっ、ちゅ……♡指フェラ、しちゃった……」

起きたいのに起きられない。目が開かない。意識の奥底をぎゅつと握りしめられたみたい。

い。

だいぶ呑んだもんなあ。起きたら二日酔い確定だわ。

「ちゅっ……ちゅば……ちゅぶ……」

今度は、唇に何かが触れる。

キス……されてるのかな？

「ん……ちゅ……れろろ……♡」

歯列を舐め回されて、ちゅうう♡と上唇に吸い付かれ、舌先をちゅう♡としやぶられる。随分濃厚なキスされてる気がする。

これって、もしかして――

「……ユキヤ……？」

無意識に唇が開いて彼氏の名前を呟く。

これって夢なのかな？

夢の中で、ユキヤが逢いに来てくれたのかな？

ああ、それでもいいや。嬉しいな。

「……ふざけんじゃねえよ」

ユキヤ？　なんで怒ってるの？

私がだらしなから？　お酒ばかり呑んでるから？

ごめんね。やつぱり私達、もうダメなのかな。ユキヤさ、二股してるよね？

こないだ、スマホ見ちゃったんだ。

てか、通知くらい切っておいてよ。

『ねえ早く帰ってきてよ♡りりあ寂しいよ♡』

どう見ても女じゃん。ふざけんなよ。

「れろ……ちゅば……ちゅば……」

頬にべったり何かが張りついてる。

犬の舌……じゃないか。

もつと厚みがあつて、どっちかというと人間の舌みたいなの……

なんで、ほつぺた舐められてるの？

「ちゅ……ちゅつ……ああ……柔らかくておいし……ちゅば……っ」

おいしいって、変なの。

「全部……俺の舌で舐めて……俺のヨダレまみれにしてあげる……れろっ……」

「……んっ♡」

やだ、ワキも舐められてる気がする。くすぐりたいよ♡

「ねえ、ワキも性感帯なんだって。こうやって、くばくばするとき……まんこみたいじゃない？ やらしー」

くに、くにっ。

ワキのシワを広げて、れろれろされる。

うう、ぬるぬるする。むずむずするような、気持ちいい、ような……♡

「れろれろ……ちゅう……ちゅば……おっぱいも……吸っちゃうからね」

「ふあ……♡」

乳首、じゅるじゅる吸われてる♡かりかり噛まれて、おっぱいジンジンしてきた♡

「れろお♡ちゅば、ちゅば♡俺のヨダレまみれになっちゃった。エロっ」

ぢゅうう♡と乳首を強く吸い上げられて、おっぱいがちよつと痛い。

「ん……っ♡」

へんな声出ちゃった♡でも、夢だからいいよね♡

「はあ……はあ……」

ぷにと、唇に弾力がある熱いモノが押し当てられる。

鼻に抜ける、青臭い匂い。

これって……ちんぽ？

「ん……あっ……♡」

ぬりゅ♡ぬりゅ♡

唇の裏でごしごしちんぽ……っばい何かを擦られてる気がする。

全身舐められてちんぽ舐めさせられる夢を見るなんて、私も欲求不満だなあ。

「ん……やつは無理か……じゃあ……こつちやつちやお。ちゅば……れろ……れろ……」
え、うそ、これっておまんこ舐められてる？

舌がクリトリスれるろしてる♡

「ひゃ……♡」

さきつぽちゅつて吸われてる♡何度も何度も。根元から舐められて、まるでフェラチオされてるみたい♡こんなの初めて。

夢なのに、やけに生々しいなあ。

「は……あ……♡」

ぬる……ぬりゅり……♡

丁寧に割れ目を何度も往復して、
中ちゅうちゅう吸われてる。

「ん……はあ……っ♡♡」

気持ち良すぎっ……♡

「ちゅ……はあ……。メスくさ……。♡おいし……。じゅるるう……」

クンニなんてしてもらったの、何時ぶりだろう？

夢なら醒めないでほしいくらい。

ユキヤと全然違う。

こんな丁寧に愛撫してくれないもん。

ユキヤのセックスつて、ホントはあんまり気持ち良くないんだよね。

前戯テキトーだし。

自分がイクために挿入して、自分が気持ち良くなるようにしか動かないし。

あーあ。

私、ユキヤのどこが好きだったのかなあ。

わかんなくなつてきちゃった。

「……俺の方が好き、なのに……なんでアイツなんですか？俺なら……絶対……泣かせたりしないのに」

ダメだ……聞き覚えがある声なのに、頭の中にモヤがかつて思い出せないよ。

「……ぐつちよぐちよじゃないですか。俺の舌、そんなに良かったですか？」

誰かが耳元で囁く。

うん、すつごく気持ちいい。もつとしてほしい。

「……指、挿れちゃいますね」

ずにゆにゆう……♡

あ……今度は指が入ってきた。

中、ぐにぐにつて押し開いてる。

ぐりぐり♡つてクリトリスの裏擦つてる。

「ふぁ……おまんこ……いい……♡」

やだ、声が出ちゃった。でも夢だし、いいよね。

「アイツはこんなこと、してくれないでしょ？　ね？　もつと俺なら、気持ち良くさせて

あげますよ」

くちや♡くちや♡くちや♡

ちゅふ♡ちゅふ♡ぷちゅ♡

やだ、クリ舐められながらおまんこ弄られてる？

両方なんて、ずるいよお♡

「あ……あぁ……♡」

やだ、上の方押さないで♡そこ、弱いから♡

「すご……メツチャ中うねってる。ここ、好きなんだ？」

ぐちゅぐちゅ♡ぐりいい♡

やだ♡もつと強くなってきた♡ダメだつてばあ♡

だめ♡♡そこ♡膨らんと♡♡キュウキュウ押されたら♡

ぷしゅううう！

「あ……♡あぁ……♡」

「潮……噴いちゃいましたね。やらしいなあ……まんこヒクヒクして……かーわい。食べちゃいたい」

耳元でいやらしく誰かが囁く。

ねえ、あなたは誰なの？

こんなに私を隅々まで愛してくれるなんて。

夢の中で、私が創り出した幻覚なのかな？

ああ、それでもいいや。

気持ち良く、になりたい……♡

「は……♡やば、チンポもう限界……。挿れちゃいますね」

ぶにつ♡

え、おまんこの入り口に何か当たってる。

この、熱くてぶにぶにしているのって、もしかしてちんぽ？

うそ、しちゃうんだ。ユキヤ以外のひと。

ああ……でもいつか。

これ、夢だもんね。

誰としたって、自由だ。

ぐに……♡ぐぬぬっ……♡

「ああ……っ♡」

やだ、おまんこ押し広げられて、ゆっくり入ってくる……♡
にゅぷぷ、にゅるううう♡

「はあ……♡あ……♡」

うそ、中までぐっぽり入ってる♡

お腹の中で、ちんぽが熱くてドクドク言ってるの感じるっ♡

（あー……セックス久しぶりすぎて、ヤバイ♡）

もうこれだけでイっちゃいそう。

ユキヤのより、おつきくて硬くて、エラが張って……好きなちんぽ、かも。

「っ、あー……ヤバ……まんこメツチャ吸い付いてくる……良すぎ……♡」

あなたも、私のおまんこ気に入ってくれたの？ 嬉しいな♡一緒に気持ち良くなる？

「こんなにされても……起きないなんて……っ。ほんと、飲み過ぎですよ……っ。だからっ、俺なんかに、ちんぽハメられちゃうんですよ……っ？」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬるーっ♡ぬぽっ♡

すご、きもちい……っ♡

ゆっくりカリが入り口ひつかいて、ぬるぬるって抜き差しされるの、好きっ♡

「ひ……は……♡あ……♡ああ……♡」

にゅっぽ♡にゅっぽ♡にゅっぽ♡にゅっぽ♡

あ♡深いところ入ってきた♡お腹の裏っ♡カサでコシコシされてる♡すご♡ぞわぞわって
きちゃう♡

「んは……♡はあ……♡あ……♡」

「ねえ、アイツのちんぽと俺のちんぽ、どっちが好き？ 俺が好きって言つて。絶対絶対
絶対絶対俺の方が、セックス上手いに決まってるしっ……!!」

とちゅっ♡ぐぐうう♡

「ひっ♡おおおん♡」

すご♡奥っ♡押されてる♡

これって、もしかして子宮口まで届いてる？

こんなの初めて♡すごい……♡

「あゝ♡エロい声出してさあ……っ、もうこんなの、付き合うしかない？ そうでしょ？
ねえっ……♡」

とんっ♡とんっ♡とんっ♡

すごっ♡ちんぽで子宮ぐいぐいこねまわされて押されてるっ♡お腹の形、かわっちゃう

♡

ぐにいいい♡ばちゅんっ♡ばちゅん♡ばちゅん♡

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

こりゅっ♡こりゅっ♡ってポルチオ叩かれてるっ♡お腹ジンジンしてっ♡おまんこっ、ドロドロに蕩けてる♡

すっごい愛されてる感じる♡こんなに私を愛しげに、大切に抱いてくれる人、初めてかも……♡

「あゝすご、メツチャ中締まってきた。ザーメン欲しいんだ？　いいよ、出してあげる……っ」

うん、ほしい。中に出して♡熱いの、いっぱいほしい……♡

ぐちゅぐちゅ♡ぐっぽ♡ぐっぽ♡ぐっぽ♡

「っ……くっ、は、イク……あ……あっ……♡」

どくどく♡どぷっ♡びゅく♡びゅく♡

「……♡♡あ、あゝ♡♡♡」

なんか、膜みたいなのが張ってるみたい。

でも……熱いのがドクドク言ってるの、お腹の奥で感じる……♡

「はあ……かわいい……好き……好き……大好き……っ♡先輩っ……好きだよ……♡ねえ、俺のものに、なってよ……」

「——」

（今、先輩って……聞こえた？）

ずっと頭にかつてたモヤが、じんわりと晴れてきた。

この呼び方、この声……もしかして……

（志信、くん……？）

「先輩……先輩……お願いだよ……ねえ……俺の気持ちに、気づいてよ……」

泣いてるの？ どうして？ 泣かないで、志信くん。大丈夫だよ。私が傍にいるからね。

★★★

「……わあっ！」

ハッ、と目が覚めて飛び起きる。

私の顔をのぞき込んでいたらしい志信くんが、のけぞって「うわ」と小さく叫ぶ。

「……やっとなんて起きた」

「し、志信くん。なんでいるの？」

「なんでって。ぐでんぐでんの先輩一人で置いておけないでしょ。あんな吞んで急性アルコール中毒にでもなったらどうすんの」

「……面目次第もございません……うっ」

ガンガンガンガンガン！ と頭の中で道路工事されてるみたいな頭痛が襲いかかってきて、額を手で押さえる。

「いつつ……た……」

「大丈夫スか？ とりあえず水持つて来ます」

「う……ありがと」

キッチンに立つてコップに水を注ぎ、私に手渡してくれる。もう勝手知つたる自分の家
って感じ。

「ごめんね……迷惑かけちゃって」

「別に、いつものことだし。今から栄養ドリンクとかミネラルウォーターとかコンビニで
買ってきますよ」

「ホントに、助かる」

「じゃ、すぐ行つてくるんで」

出て行くこうとする志信くんを、咄嗟に呼び止める。

「ねえ、志信くん。昨日――」

「……なんスか？」

「……ううん。なんでもない」

「変な先輩」

志信くんはくすつと笑って、部屋を出て行った。

「……夢、だよな……？」

【体験版はここまで。続きは製品版でお楽しみください！】